



何も言えない死刑囚に代わって、
何も言わない「生命」から死刑を考える

死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」

東京都荒川区南千住一―五九―六三〇二

<https://twitter.com/AyaseSobanokai>

立場で対立する死刑制度論

死刑制度の是非については、個人や社会の価値観に大きく影響されます。実際は存置派と廃止派のそれぞれの立場で議論されており、言葉でどのように精緻な理論を組み立てても、立場に拘る以上、共感や一致点を見出すのは困難です。

この「立場」の違いに対し、どこかに「あいだ」がないかと考えたのが「生命」です。

生命は立場を超えて同じように動いています。

生命は意志と関係なく生きようとしている

「生命は意志と関係なく生きようとしている」これは実感できると思います。

死のうとしても自分の意志で心臓は止められません。勿論、他人の意志で自分の心臓も止められません。

他人の力で、呼吸を止めて殺された人はいますが、自分の手で呼吸を止めて自殺した人は知りません。

人が意志の力で動かせるのは筋肉だけです。人が生きることがは外から、水、空気、食べ物、熱、光などの要素を取り込み排出し再生する流れです。

こういつた流れが途絶えた時に死を迎えます。絞首刑はこういつた生命の自己再生の流れを強制的に止める行為です。

生命活動と社会の違い

「生命は自己再生の流れである」生命は外の環境と不即不離であり、刻々と入れ替わっています。

つまり外の世界と私は完全に分離できず、また生命そのものも刻々と変化し、厳密な意味での自己同一も存在しません。

死刑制度は死刑囚を犯罪時と同一人物として、個人を特定し自己責任を求めるものです。だからこそ、死刑を執行することだけは容認できません。なぜなら、「生命」の本質に逆らう行為だからです。

死刑囚も刻々と変化して、我々と完全に切り離せないからです。

犯罪者も社会の一員である

死刑囚の多くは殺人を犯しています。人を殺している以上、自ら死刑廃止は言いにくい立場にあります。

しかし、死刑にされるのは、裁判官でも検察官でもなく、死刑囚のみがこの現実を受け入れなくてはなりません。

死刑を納得し、覚悟を決めた死刑囚でも体は自然に生きるための活動をしています。生命活動と違う行為を受け入れるのは死刑囚にとつて大変大きい精神的苦悩を伴います。

もつと生命にも思いを寄せ、人を生命としてどう扱うのか、正義だけでなく生命の本質に触れた慈悲の心も真剣に考えてほしいものです。

凶悪犯罪者などの「邪魔者は消せ」ではなく、発達している精神医学や生物学などの力を借りて、社会での更生プログラムの確立に力を注ぐべきではないでしょうか。

当面は、死刑執行を止めて、科学の叡智に期待したいものです。(H)